

まちからむらへ

これまで人が「むら」から「まち」へ流れていく一方でしたが、新たに「まち」から「むら」へ入り、「むら」から「まち」へ向かって新たな発信をする人や動きが少しずつできています。この連載ではその動きを学生が取材し、若者の視点からお伝えしていきます。

むらからまちへ

今回は、地域の資源を地域で利用する循環型の社会を目指し、森林バイオマスの魅力を京都から発信している(株)Hibana(ヒバナ)代表の松田直子さんにお話を伺いました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

バイオマスとは、再生産可能な生物(bio)由来の資源(mass)のこと。例えば、落ち葉や稲わら、家畜糞尿、食物残渣等がある。その中でも木が由来の資源を森林(木質)バイオマスと呼ぶ。

昔の日本では、薪や炭で料理をし、暖をとり、再生可能な資源を使った持続可能な暮らしが営まれていた。木を伐つても、切り株からはまた新しい芽が出て、20年ほど経てば、また薪や炭のための材をとることができる。また、人が伐ることでも様な生物が暮らす明るい森が維持されてきた。しかし、高度経済成長の時代から、枯渇性資源である石油中心の暮らしになり、薪や炭は使われなくなった。人の手が入らない森林は荒れていった。けれども、地球温暖化・化石燃料の枯渇・森林の荒廃等の問題が深刻になる今、森林バイオマスへの注目が高まっている。ペレットストーブ等、新しい利用方法も生まれている。とはいえ、まだ森林バイオマスに関する情報は充分にない。Hibanaは、森林バイオマスの生産者・利用者に情報を届け、今の時代にあった「火のある暮らし」を提案している。

森林バイオマスに興味を持ったきっかけを教えてください。

出身は愛媛県伊予市です。中学から京都に住むようになりました。森林や環境に興味を持つようになったのは、大学4年の時に熱帯雨林問題について書かれた新聞記事や本を読んだからです。90年代後半、ちょうど熱帯林の破壊が多く、マスコミにも大きく取り上げられていた頃ですね。熱帯林破壊の原因というのは私たちの生活や、日本の森林のあり方に繋がっていると知り、「日本の森林をなんとかしなければ」と思いました。海外の原生林が乱伐採される裏で、日本の雑木林や人工林は人が手入れをしなくなったため荒れていきます。森林を守るためには、以前のように日本の木が使われ、林業がお金になることが必要です。そのための道のひとつとして、森林バイオマスに可能性を感じました。捨てられてしまっていた端材や大鋸屑がエネルギーとして商品になれば収入源が増えますし、石油や重油のかわりに使えばCO2削減にもなります。

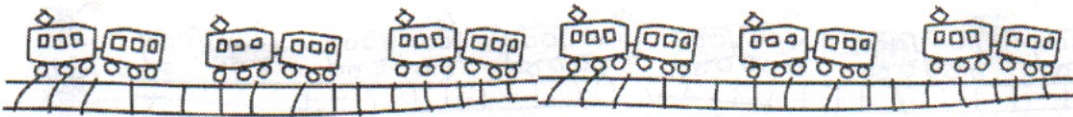
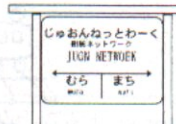
Hibanaを設立するまでの経緯を教えてください。

大学院では、森林バイオマスを使った地域活性化



「京都森林バイオマス絵巻」と木質ペレット。ペレットとは木屑や大鋸屑を固めた燃料。現在、絵巻は愛知・神奈川バージョンも完成。

化、そのための政策のあり方を研究しました。卒業してコンサルティング会社の環境部門で働き出した頃、京都府の森林バイオマスをテーマにした勉強会を知り、参加しました。勉強会は半年で終わったのですが、「研究して提言して終わり」ではなく実際に実践活動しようとして、01年、5人のメンバーで「薪く炭くKYOTO」という団体を立ち上げました。全員がボランティアで、普及啓発がメインの活動でした。ペレットやペレットストーブの展示をしたり、勉強会をしたり。遊びながら森林バイオマスがわかる「森林バイオマスすごろく」や、京都市内の森林バイオマスを使っているお店を紹介する「京都森林バイオマス絵巻」



も作りしました。現在、会員は90人ほどになっています。

「薪く炭く」の活動は楽しかったのですが、活動が広がるほど、問い合わせや協力の依頼も増え、ボランティアでは応えきれないもどかしさが生まりました。「もっと本腰を入れて取り組みたい」という思いが強くなり、06年に会社を辞め、一緒に活動していた成田真澄さんと二人で(株) Hibana を立ち上げたのです。

Hibanaではどのような事業を行っているのですか？

事業の三本柱は、森林バイオマスに関する調査・事業支援、薪炭・ペレット・ストーブ等の販売、環境教育教材の開発とイベント企画です。環境省や自治体の委託調査、官公庁・森林組合等のポスターやリーフレットの作成が主な収益ですね。

山村地域の方からは、「どうしたら人が来てくれるか」という相談をいただくことが多いです。例えば、「イベントをしたいと思ってるが、どう広報すればいいのか」「チラシをつくってほしい」「一緒に何かイベントをやらないか」といった感じです。やはり、人が減っていることが一番深刻な問題なのです。

オンラインショップや京都市上京区にある店舗では、薪・炭・七輪・火鉢・ストーブなど、森林バイオマスグッズを販売しています。自主事業で一番大きいのは、薪販売です。街路樹や庭木を切った際の枝等を薪にして、「復活薪」として販売しています。例え薪一束でも、本来ならば捨てられてしまう物を使ってもらえた時、Hib



森林組合の方々と協力して行った、親子向けイベント。竹にパンを巻いて焼く薪料理体験をした。

anaを通じて人や物が繋がった瞬間というのは嬉しいですね。

活動、仕事の中で、どんなことを感じましたか？

炭や薪といった昔ながらの形で、チップやペレットのような新しい形で、現代の暮らしの中でも森林バイオマスを活かす可能性はたくさんあるということですね。

「京都森林バイオマス絵巻」では、昔から薪炭を使い続けているお豆腐屋さん・銭湯から、ピザ屋さん・パン屋さんのように新しく使い始めたお店まで、30店舗を紹介しています。載せきれなかったお店やその後寄せられた情報も含めると、今は5倍くらいのリストがあります。自分の家で薪やペレットストーブを使うことは少しハードルが高いと思いますが、地域の中で使っている人を応援するというのも一つの手立てかな、

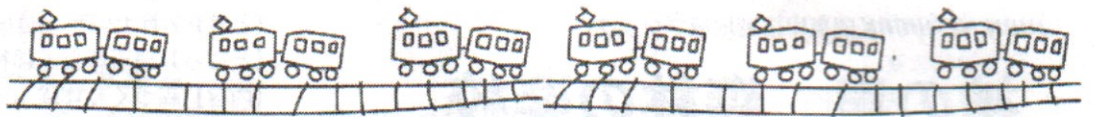
と思います。

「ストーブを置きたい」「薪や炭を使いたい」という相談も、個人から、病院・幼稚園、公共施設まで、様々な方から寄せられます。チップやペレットを使った床暖房・給湯は、公共施設や民間の温泉で増えています。家庭レベルでも、ストーブやグリルなど、色々な道具で使えるようになっていくんですよ。チップやペレット工場を造り、地域のエネルギー自給率を高めようという市町村レベルでのバイオマスタウン構想も広がっています。バイオマスタウンアドバイザーとして、そのような計画づくりのお手伝いもしています。

森林バイオマスを普及させる上での課題はありますか？

今、火を使うことに対して、「危険」「面倒」「臭い」といったマイナスのイメージが強くなっていると感じます。私達が公園で許可をもらって焚き火体験をやっている、近隣の方に怒鳴り込まれたこともありました。薪ストーブを使っているお宅で、近隣から苦情がきて裁判沙汰になった事例もあります。新しい技術を使うことで、楽しく無理せず「火のある暮らし」ができることや、環境問題の解決にもつながることを、もっと伝えていきたいと思っています。

ペレット製造設備は、国から補助金の後押しもあり増えています。問題は稼働率の低さです。日本全体の平均で稼働率3〜4割くらいではないかと思っています。工場の規模が大きければ生産コストは下がるのですが、販路を確保するところまで考えていないのです。3億円もかけて巨大な施設を造っても、周囲にペレットの需要がなく稼働率1



%というところもあり、閉鎖してしまう工場もあります。家庭のストーブで使う量はたかが知れていますから、公共施設や温泉のボイラーといった販路を確保していなければ無理なのです。理想は、需要に見合った小さな工場を地域ごとに造ることだと思います。製材所があつて、大鋸屑が出る場所ならば、ペレットの成型機だけなら300万くらいなので、比較的簡単にできると思います。

今後の目標を教えてください。

ちゃんと山にお金を返して、山が元気になるような仕組みをつくりたいと思います。まだHibanaの事業は、薪炭やペレットのお金が生産者や山に返って、また森林の手入れが進むという循環になるまでには到達していません。

例えば、山をきれいにしたいという思いで、伐採した木で炭焼きをするNPOがあります。けれど、道の駅に出したりしても売れず、活動を止めてしまうケースが多いのです。炭が売れて収益があれば、また炭を焼いて、山をきれいにする活動を続けていくことができます。包装の仕方一つで、売れ行きは変わります。Hibanaで売る力・販売力をもっと提供できればと思います。

石油が値上がりしてから、問い合わせがぐつと増えました。使い方次第でペレットや薪は石油ストーブより安上がりになります。地域の身近な資源を見直すきっかけになればと思います。わざわざ中東の国々を豊かにしなくても、身近な森林がエネルギーになり、そのエネルギーを利用することで、森林も地域も豊かになります。

京都は東京とはまた違った発信力のあるところだと思います。まちの人が森林に興味を持つきっかけをつくり、山の人の声を大きくしてまちに届ける、山とまちの間のコーディネーターになればと思います。



色々な森林バイオマスグッズが並ぶHibanaのお店。代表の松田直子さん(左)と学生インタビューの澤優香さん(右)。

(株) Hibanaのことをもっと知りたい方は…

■ HP

<http://www.hibana.co.jp/>

■ E-mail

info@hibana.co.jp

■ TEL/FAX

075-803-6277/075-803-6299

■ 住所 (お店兼事務所)

〒602-8104

京都市上京区下立売通大宮西入
浮田町600

学生インタビューより

神戸市外国語大学3年 澤 優香

昨年、私は京都で行われたJ.U.O.Nの総会や兵庫の森林の楽校に参加しました。間伐を体験し、日本の森林が抱える問題を知りました。木を伐るとするのは本当に大変な作業で、木が売れなければ森林の手入れが進まないのは当然だと思います。

今回、松田さんのお話を聞いて、日本の木の利用を進めるために「ペレット」というものがあることを初めて知りました。特に驚いたのは、ペレットを燃料にした冷房の装置もあるということです。

森林の楽校で、日本の森林を守るためには木を伐らないといけないことを知り、さらに今回のインタビューでは、暮らしの中でも木を使う必要があること、今はペレットストーブ等の利用方法も増えていることを知りました。これまで全然知らなかったことばかりで、「株式会社をつくって、もっともつと情報を発信していきたい」「楽しく、たくさんの人に知ってもらいたい」という松田さんの言葉に共感しました。

印象に残ったのは、学園祭で炭や薪を使ってもらおうという企画を立てた時、大学や学園祭実行委員会からいい返事がなく、結局うまくいかなかったという話です。森林ボランティアとして木を伐る以外にも、木の良さを伝え、木を使う場を増やす等、都市住民として、学生として、色々な角度から取り組めることがあるのではないかと感じました。